

## われわれはなぜ防災教育をおこなうのか —倫理の虚構性を超克するための理論的検討—

近藤誠司<sup>1)</sup>

1) 学術会員 関西大学社会安全学部安全マネジメント学科、准教授 博士（情報学）  
e-mail : kondo.s@kansai-u.ac.jp

### Theoretical Consideration on Disaster Risk Reduction Education from the Viewpoint of the Contingency

Seiji Kondo<sup>1)</sup>

1) Academic member, Faculty of Societal Safety Sciences, Kansai University, Associate Professor, PhD (Informatics), e-mail: kondo.s@kansai-u.ac.jp

#### Abstract

Even though Japanese society currently has many kinds of approaches for disaster risk reduction (DRR) education based on lessons learnt from previous disasters, there are few theoretical studies on the ethical basis regarding DRR education. Therefore, this paper focuses on the necessity of DRR education through theoretical examination of “ethical fiction” derived from the viewpoint of the contingency. As a result, it found that DRR practices necessarily had the advantage in the sense that they had potentiality to create the future unintentionally owing to a struggle with both the contingency and the unknown.

Keywords: Disaster Risk Reduction (DRR) Education, Contingency, Ethical Fiction  
Trolley Problem, Consummatory/Instrumental Action

#### 要約

日本社会では今、多種多様な防災教育がおこなわれており、まさに活況を呈しているかに見える。しかしこれは、間歇的に盛り上がりを見せる単なる社会の要請に過ぎず、喉元を過ぎればすぐに停滞してしまう危険性もある。こうした状況をふまえたときに、われわれはなぜ防災教育に注力するのか、その根拠を理論的に探究しておく必要がある。そこで本研究では、偶有性に根拠をもつ「倫理の虚構性」に限界や制約をみるのではなく、偶有性を倫理の土台に据えることによって防災教育実践のアドバンテージを見出す理論構築をおこなった。さらに、未定の価値を生み出すポテンシャルティを孕んだ防災教育実践こそが、まずもって現前の取り組み自体を賦活し、防災教育以上の価値あるアクションとなり得ることを示した。そしてさいごに、合理性・効率性を重視する道具主義的な防災教育観を超

克しようとする最新の議論—“コンサマトリーな防災”や“すごす関係”—との接続を検討した。

キーワード：防災教育、偶有性、倫理の虚構性、トロッコ列車問題、  
コンサマトリー／インストゥルメンタルな行為

## 1. 問題意識

現代日本社会において、「防災教育を促進すること」<sup>1)</sup>は当たり前のことであって、いまさらその意義に疑義を差し挟む余地などないように思える。2011年3月11日に端を発する東日本大震災の経験をふまれば、二度と同じような“過ち”<sup>2)</sup>をおかさないためにも、防災・減災の理念を学校園などにおいて具現化することは、いわば当然の至上命題であって、もはや足踏みすることなど許されないように見える。そうであれば、あとは、どのような知識や技術を（what）、どのような方法によっておこなえば（how）、より効果的・効率的に目標を達成できるのか、また、どのような主体（who）を巻き込めばより力になり得るのか、この点を仔細に吟味・検討すれば事足りるということになるだろう。すでにして、問題設定のステージは「方法論」の水準にしぼられているのかもしれない<sup>3)・4)</sup>。

しかし、多くの被災地では、前段で“過ち”と記した事象の捉え方—たとえば、人々は津波を侮っていたのであり、大勢の犠牲が出たことは失敗だったとか、人々は土砂災害や豪雨災害を見くびっていたのであり、住民は愚かにも油断していた等の意味付け方—それ自体が、倫理的な意味において妥当であるのか、何度も問い返されてきたはずである。この点において大澤（2012）<sup>5)</sup>は、極限的な状況、とりわけ災害や破局を例にあげて、「倫理の虚構性」を指摘している。たとえば、ナチスの強制収容所という過酷な環境のなかに押し込められて、もはや“生きる屍”のようになった人々—隠語で“ムーゼルマン”と呼ばれていた—に対して、「動揺するな」、「威厳を保て」、「そもそもおまえたちは平和な社会を構築するために、これまで全力で取り組んできたと言えるのか」と叱咤するようなことは、どこか“恥知らず”な印象を与える。論理的な次元において、事前の対策—ここではナチスに抵抗すること—が重要であったことはまだわかるとしても、倫理的な次元においては大きな違和が残ってしまう。同じように、津波被害でなにもかも失った人を前にして、「そもそもおまえたちは事前の防災活動に全力を尽くしてきたと言えるのか（してこなかったから被災/敗北したのだろう）」と忠告することは、やはり“恥知らず”な行為として受け止められるはずである。それはなぜなのか。ここで大澤は、倫理は全面的に「偶有性（contingency）」に依存しているからだと分析している。コンティンジェンシーとは、平たく言えば、「他でもありえたこと」である。

破局を逃れた人は、自分たちが生き延びたことについて「幸運」（luck）だったうえに、いま自分たちが倫理的なふるまいをすることができるポジションにいることにおいても「幸運」なのだ。この二重の意味での「幸運」は、しかし「他でもありえたこと」なのかもしれない。そして明日には、その「幸運」は「不幸」にも失われているかもしれない。地震が起きて落下物によって不意に命を落としているかもしれないし、雷に打たれているかもしれない。旅先の海際で津波にのまれているかもしれない。他でもないあなたが「不幸」に見舞われて、周りの他者のほうが「幸運」にいだかれて、あなたの不覚を“恥知らず”にも詰っている可能性だってありえるのだ。しかもそのような自身の想定を超える出来事は、わざわざ災害などを例に持ち出すまでもなく、人生においていくらでもある。

このようにして、たまたま自分が偶然にも「幸運」な側にいることに依拠して、他者の不幸な帰結を指さして「なぜあらかじめ～しておかなかったのだ」とレトロスペクティブに問うことの欺瞞を、われわれは立ち止まって考えてみる必要がある。防災の教訓集の多くは「後出しジャンケン」（hindsight）<sup>6)</sup>なのではないのか、と。しかし、そのことを十分に認識したうえで、それでもなおわれわれは、なにゆえに防災を学び合うのかという根底的な視座を（why）、あらためて確保しておかなければならないものとする。本研究の問題意識は、ここにある。

## 2. 防災教育の根底をなす倫理：三つの視角から

さて本稿では、防災教育の倫理的な意義づけを理論的に検討しなおそうとしている。したがって、個別具体の実践事例の舞台裏を開陳したり、実証的な調査データを分析したりするアプローチはとらない。しかし、筆者は現在複数のフィールドにおいて防災教育プロジェクト（アクションリサーチ）<sup>7)・8)</sup>を実践している<sup>9)~15)</sup>ことから、次章以降の考察や展望は、実体験に根差した洞察をもとに記述する。

以下、三つの視角から考察をおこなう。次章（第3章）では、われわれは防災実践共同体のメンバーとして、好むと好まざるとにかかわらず皆すでに当事者として投げ込まれていることを、有名な「トロッコ列車問題」を援用して論理的に証明する。続く第4章では、防災教育の根本にある倫理が偶有性に依拠しているからこそ一すなわち「倫理の虚構性」を前提にしなければならないからこそ一、われわれは多様なアプローチによって防災教育にチャレンジすることに意義を見出すべきである点を確認する。そして第5章では、大澤（2013）の「余剰的同一性」<sup>16)</sup>の概念を引照しながら「防災教育」という既定のテーマのなかに、未定の倫理の萌芽さえも孕まれていることを導出する。さいごに第6章で、本研究の実践上の意義をあらためて確認したのち、課題と展望を述べる。

## 3. 防災実践共同体の構成員として逃れられないことの自明性

「防災なんて、大人に任せておけばよい」と考える児童・生徒も大勢いることだろう。そして大人の中にも、「防災担当者に任せておけばよい」と考えている人もいることだろう。「わたしは関係ない。それどころではない。だから、防災を偽善者ぶって押し付けたくないでほしい」とか、「願わくば、こんな面倒なことには関わりたくない。奇抜な人に任せておけばよい」とか、そんな本音を、防災教育や地域防災の活動に参加したことがある人であれば、一度ならず、耳にしたことがあるに違いない。

こうした反感や反発を前にしたときに、「いや、防災は大事なことなのだから大事になすべし」というトートロジーでもって説得を試みようとしても、奏功するとは限らない。反感や反発が輪をかけて大きくなることさえ予測される。そこで、声色を替えて、「自分の命を守るために」とか「愛する人の命を守るために」とか、ごくわかりやすい目的を明示することで仲間に引き込もうとする向きもある。しかし、今まさに自分のことを棚にあげようとしている人に対して、自分の命を守る意義を問いかけてみたとしても、それはやはり“余計なお世話”であろうし、他者の命を守ることを目的に掲げて利他的な献身を求めてみたとしても、心理的なハードルが下がることは決して多くはないだろう。自立した人からはその人が自律している（と思っている）がゆえに、“そんなことは関係ない（おまえに言われたくない）”というレスポンスが返ってくるものである。

このすれ違いの閉塞を整理すると、ここには二重のアポリアが隠されていることがわかる。ひとつは、防災という営みの究極の目的は、本当に生死を分かたず未定の危機を回避すること（だけ）なのかという問い、そしてもうひとつは、そもそもあなたは防災に関して無関係であると言えるのかという問いである。本章では、まず後者を検討してみよう（前者は主に第6章でふれることになる）。ここで援用するのは、倫理学上、あまりにも著名になった「トロッコ列車問題」である。

フィリッパ・ポーザンケト（のちのフィリッパ・フット）が、「分岐線問題」を『オックスフォード・レビュー』に発表したのは1967年のことだったという<sup>17)</sup>。迫りくる暴走したトロッコ列車、このまま見過ごせば5人の男を跳ね飛ばす大惨事になる。たまたまわたしの目の前には転轍機のレバーがある。これを動かせば、5人の命を救うことができる。しかし、進路を変えた暴走列車は、別の線路上にいる1人を巻き添えにすることになる。あなたは、レバーを動かすべきか否か。

この倫理的なジレンマは、その後、いくつものバリエーションを生み出し、50年以上経った今でも世界中で熱心に議論がおこなわれている<sup>18)</sup>。衆知のとおり「トロリオロジー（路面電車学）」という学問領域が形成されてさえもいる。そして巷間でも、たとえば、「トロッコ列車の接近を、太った男が橋の上から眺めていて、この男を突き落とせば列車の暴走を食い止めることができる、あなたはどうしますか」というバージョンが有名になり、バラエティ番組のトークテーマになったり、『太った男を殺しますか(Would You Kill the Fat Man?)』という著作が発刊されたりもしている<sup>17)</sup>。さらに2009年の「TEDカンファレンス」では、「地震後に津波が発生、一刻も猶予がない状況下で、浜辺にいるナイジェリア

人5人に危機を知らせるか、それともイギリス人1人に知らせるか、どちらを選びますか」という設問が、当時のイギリス首相に投げかけられるというハプニングが起きて話題を呼んだ<sup>17)</sup>。

こうした難題を前にしたときに、しかし実は多くの人が素朴に抱くのは、結局は「議論のための議論をしている」という感覚—自分は無関係で、当事者ではないという感覚—ではないだろうか。そして、ここで本稿の主題である災害対応の分野に引き寄せて考えてみれば、大きく2点、トロリオロジーの「問題設定のしかた」自体が問題を内包していることに気付くだろう。1つは、ごく単純に言って、未来は精確には予見できないということである。線路の先に、一体何人の人がいるのか、実際には確定した情報があらかじめ得られるとは限らないのだ。したがって、いわゆる功利主義的な“ソロバン勘定”をすること自体が、そもそも成り立たない。片方におよそ数人、もう片方におよそ数人いるという情報があったとしても、そのような曖昧模糊とした情報を比較すること自体、意味をなさない。ところで、もう1つの「問題設定上の問題」が、根柢的に重要である。われわれは、確かにトロッコ列車の行く末を案じているのだが、そのわれわれ自身の真なる立ち位置は、トロッコを外部から傍観する地平などにあるのではなく、実は将来の災害リスクに向かって走らざるを得ないトロッコにすでに乗り合わせているということである。予見しがたい未来を見据えて、それでも舵を握らなければならない状況下—まさに、リスクの原語となった *risicare* (座礁しないように船を漕ぐ) をしている状況下—に、われわれは好むと好まざるとに関わらず投げ込まれてしまっている。その渦中でのふるまいかたが鋭く問われているのであって、転轍機のレバーを握ろうが握るまいが、自分に火の粉が飛んでこないポジションで空理空論を考えているのとはわけが違う。したがって、事態のプレイヤーたちが切迫した事態に内在していることを認識したうえで対応を検討するのでなければ、納得のいく解法など見いだせるはずもない。トロッコ列車問題を安全地帯—事態の渦中から外在した立ち位置—から解くスタンスには、こうしたポジションニングの自覚が欠如している点において共通する不足を抱えていると言えるだろう。

フィリッパ・フットの問題設定の原型においては、実は、ジレンマに陥る主人公は「傍観者」の位置から危機的な事態を眺めていたのではなく、トロッコ (実際にはトラム) の運転手のポジションで危機の渦中にいたのだという<sup>17)</sup>。このことは、リスク社会論の論脈<sup>19)~21)</sup>からも、あらためて照射しておく必要があるだろう。われわれはこの難局に対して、なんらかの行為をなすことも、そしてなさないこともできる。ただし、その作為/不作為に対する社会的責任からは、だれも逃れることはできない。社会の構成員すべてが渦中の当事者であるという点において、すでに同じポジション (「リスクのまえの平等」—ただしもちろん、現有の資源がすでに不平等である点は丹念に検討する必要がある—) に立っている。リスクの対応行動のひとつである防災の営みや防災教育のアクションは、本源的な意味において、純粹に無関係な人を生み出し得ない。こうして、われわれが防災実践共同体の当事者であることは、意識の差や行為の違いがどうであれ、論理的には必然であると言える。「わたしは防災関係者ではない」というフレーズは、内容としては空疎である。

#### 4. 偶有性をアドバンテージとする防災教育

では次に、「偶有性 (contingency)」との関連から、防災教育の土台となる倫理とは一体どのようなものになるのか、「倫理の虚構性」を超越したその先の地平を検討していこう。

まず、本章の問いをハイライトするうえで注目すべき社会現象を、ひとつおさえておこう。それは「REG」というムーブメントである<sup>22)</sup>。「REG」とは、Raising for Effective Givingの略号であり、この名前を冠した団体は効率的なチャリティのありかたに関して助言を与えてくれる。

この団体のウェブサイトにはアクセスすると、トップ画面には次のようなメッセージが表示される<sup>22)</sup>。

##### **DONATION ADVICE TO MAXIMIZE YOUR IMPACT**

Giving to the right charities means your donation can save hundreds of lives. We provide the information you need to maximize the impact of your philanthropy. Our donation advice services are completely free and tailored to the giving opportunities best suited to you.

Why do we do it? Because we strive for a world where the worst problems are solved as soon as possible.

効果的・効率的なチャリティとは、いかなるものか。たとえば、同じ100ドルを使って社会貢献するにしても、より多くの命を救うことができる手立ては何かを「比較考量」して、より多くの結果を残せる事業のほうを「合理的に」選択することだという。難病患者ひとり救うために1万ドル寄付するよりも、マラリア蚊による感染を防ぐための蚊帳をたくさん購入すれば、数名の命を一度に救うことが出来る<sup>23)</sup>。さらに、数千キロも離れた遠い南国の島々を訪問して、自身がマラリア撲滅運動に参加することは「交通費がかさみ無駄」なので、結局は、「寄付」すればよいということになる。論理的には正しそうなこの見解を、われわれは果たして是とすべきなのか？

もうすこし災害の分野に引き寄せて事例を置き直すと、以下のようなケースがあてはまるだろう。防災に投資できる財源が限られているなかで、たとえば、山奥の限界集落のわずか数十の高齢世帯のためにハードウェアを整備するよりも、都市域の人口稠密なエリアの体制強化を検討したほうがスマートだと考えること。遠い被災地に時間とお金を費やして災害ボランティアに出かけるよりも、身近なところで資金を集めて寄付したほうが、無駄なく無理なく支援したことになると考えること。もともと防災に高い関心のあるモデル校とコラボしてハイスpek的な防災教育をほどこすプロジェクトを興したほうが、基礎的な学力に心配があるとされる“底辺校”で時間をやりくりしてわざわざ防災に“お付き合いさせる”ことよりも、高い評価を得られると考えること。

さて、このような疑念に対して少しでも理論的に応えていくには、「疎外論」と「進化論」の知見を援用して、思考の迂回路を通るのが有益である。まずは前者、「疎外論」に関して、真木悠介は『現代社会の存立構造』（1977）<sup>24)</sup>において、人間・自然・社会の関係を、次のように整理している。

本源的に〈自然内存在〉としての人間は、〈労働をとおしての享受〉という、時間性の次元において媒介された構造を獲得することによって、対・自然存在へと自己を形成する。また一方で、本源的に〈社会内存在〉としての諸個人は、〈譲渡をとおしての領有〉という、社会性の次元において媒介された構造を獲得することによって、対・社会存在へと自己を形成する。

このように現代社会を生きるわれわれは、ほとんどの場合において一ゲマインシャフトの内部に埋没しているような即自的な状況など維持することもかなわずに一、ひたすら〈媒介〉するモノを通して、つながりあっている。代表的なモノとしてすぐに思い浮かぶのは、商品や貨幣、法システムや慣習・制度、そして、言葉や情報などである。

問題は、この〈媒介〉によって人々が「疎外」され、〈媒介〉が絶対的なプレゼンスを持つようになった一「物神化」した一局面において、今度は〈媒介〉によって人々が突き動かされるドライブが生まれてしまうことである。そのとき、人々の主体性は〈媒介〉するモノたちの“奴隸”となる。

そしてもちろん、自然や社会という「他者」が、ただ剥き出しのままに直結／直流していればよいというわけではない。矢守（2016）<sup>25)</sup>も、真木の議論を慎重にふまえながら次のように指摘している。

〈内・存在〉の図式のもとにある人間にとって、自然と社会（他者）は、汲めども尽きぬ幸福の源泉である。しかし同時に、それらは底知れぬ不幸の温床でもある。これを、自然または他者が人間に対して有する「原的な両義性」という（略）。次に、他者（社会）について。「他者は、人間にとって、生きるということの意味の感覚と、あらゆる喜びと感動の源泉である。一切の他者の死滅したのちの宇宙に存続する永遠の生というものは、死と等しいといってよい。

ところで、この〈内・存在〉から〈外・存在〉に転回する契機—もしくは、飛躍—を、矢守（2016）<sup>25)</sup>は、本源的共同体の外部要因に、すなわち「自然の脅威（災害）」と「他者の脅威（戦争）」に見ている。自然による収奪に備えるために、科学や技術などの〈媒介〉を通して、人間は自然と関係するようになっ

た。またさらに一方で、他者による収奪に備えるために、組織や制度などの〈媒介〉を通して、人間は社会と関係するようになった。後段で例示された戦争を、マイルドな紛争や混乱といった状態にまで引き延ばしてみれば、災害とは、「自然の脅威」と「他者の脅威」が重層的に襲い掛かる“大いなる苦難”であると言えよう。人類の歴史は、まさに災害との闘いの歴史でもあった。

したがって、「地域防災力の向上」、「災害ボランティア」、そして「防災教育プロジェクト」などの実践は、それだけで、この転回点—〈内・存在〉から〈外・存在〉に転回する契機—を見据えることのできる貴重な営みだということもできる。ただしここでは、このようなこと“だけ”に活動の意義を押し込めることは回避して、先に進もう。

真木が『現代社会の存立構造』(1977)<sup>24)</sup>において、マルクスの『資本論』を一般化して読解したのと同じ地平に、本稿では、シモーヌ・ヴェイユの箴言を引いておこう<sup>26)</sup>。ヴェイユは、もちろん〈媒介〉という言葉など使用していないが、〈媒介〉や「疎外」の陥穽を、次のように告発している(Weil, 1947)。

人間を自身が生み出した諸発明の奴隷に貶めた陥穽を、厳密なやりかたで白日のもとにさらすべく努めねばならない(略)。

その上で、かけがえのないモノやコトと対置される、社会に増殖する〈媒介〉物たち—たとえば、商品や貨幣など—による「疎外」に対して、「量の重みに屈する精神は、もはや効率性のほかに規準をもたない。いずれにせよ、なにかの規準は必要なのだから」と釘を刺している。

人間の生の営みにおいて、人が人を見ず、ただ〈媒介〉物のほうを見るようになれば、ヴェイユの言うとおり、そこには「効率性 (efficiency)」の罟が待ち受けている。ひとつの事業をなす際に、組織や団体が「目標」を明確に設定し、活動をシステムティックに管理・統御し、結果を導き、業績を評価する。その全過程にある〈媒介〉物との一すなわち、「人」自身ではなく—関係性を最重要視するようになれば、おのずと、無駄なく無理なくトラブルなく「目標」に到達するやりかたを完遂できればそれで「成功」したものとみなされる。

この論理を実践の場で徹底して体現しようとするれば、自身がマラリア蚊によって感染するリスクをゼロにすればよい。すなわち、ワンクリックでクラウド・ファンディングによって寄付をおこない、ひとりでも多くの命を救うこと、これが現代社会においては最大の善行を為したことになる。

しかしそれでも、理論的に考えれば、そこには疑義を差し挟む余地がまだ残っているように思える。まず、完璧な目標を設定することは、物理的には困難である。また、目標が達成されるまでに起きるであろう「想定外」をすべて「想定内」に含み込むことは、論理的に不可能なことである。さらに、目標設定のプロセスに、組織や団体の誰もが参加できるわけではない。他の誰かが設定した目標は、自分にとって望むべき目標となっているとは限らない。一方で、仮に万人が納得することができて、完全に満たされるに違いない目標があったとすれば、それはもはやチャレンジする価値のある事業とは言えないだろう。

このような「目標からの疎外」は、構図が至極単純で理解することもたやすい。しかしそれよりもなお深刻なのは、「目標への疎外」状態である<sup>27)</sup>。「目標」が〈媒介〉物として「物神化」している社会では、ひたすらに目標に向かって「効率的に」突き進むことを是としてしまう。この局面では、イヴァン・イリイチのコンセプトとして著名になった「逆生産性」の病態が、やがて社会を蝕むことになる。たとえば、新薬の販売目標を達成するために、わざわざ病気を“発見”し、グローバルに病気の撲滅キャンペーンを展開して、かえって社会で不健康を拡大再生産するが如き逆機能のドライブである。

「目標への疎外」は、さらに深刻な閉塞感を人々の間に生み落とすことになる。それは、真木(2003)<sup>28)</sup>のいう「インストルメンタルな時間感覚」が際立ってしまう息の詰まる状態である。人々は「目標」が明示されているがゆえに、まだそれが達成されていないという「未達成感」に苛まれて、不足や課題にばかり目が向いてしまう。かけがえのない一度きりの生の営みを、いまここで享受している「コンサマトリーな時間感覚」は、後景へと退いてしまう。

固定化された「目標」の二重疎外 (from: ~からの疎外 / to: ~への疎外)<sup>27)</sup>によって、防災の取り組みのような社会に貢献するチャレンジは、やがて人々の生を豊かにする営みからは大きく逸れていく危険性を秘めている。これこそが、「効率性 (efficiency) の罠」である。しかしそもそもその「目標」は誰が決めたのか。「目標」を物神化させているのは一体誰なのか。

ここで、効率性の観点と対置させたいのが、本稿で「倫理の虚構性」の前提として考えている「偶有性 (contingency)」の観点である。社会の全般を覆うかみえる目標管理型 (Management by Objectives) のシステム—目標を〈媒介〉に駆動する社会—を客観視するために、ここでは大澤 (2011)<sup>29)</sup>が着目した「進化論」と「絶滅論」のアイデアを導入して、さらに論考を進めていきたい。

ここに言う進化論とは、ダーウィン流の「適者生存」のシンプルな生物進化論のことを指している。ところで社会進化論においても、同様に、強者が敗者を押しよせ、時代の適者こそが生き残るとするシンプルな考え方が流布している。しかし、デイヴィット・ラuppによれば、これでは、生命誌や人類史のごく一面しか見ていないことになる。その裏面に、もっと広い領野として開かれているのが、「絶滅論」である。地球誕生の歩みを真摯に見据えたとき、その99.9%は、まさに絶滅の歴史であった。

ラuppによれば、生物絶滅のシナリオには大きく3つのパターンがある。第1のパターンは、ラuppが「公正なゲーム (fair game)」と呼んでいるシナリオである。同時に生存している他の種に比べて、あるいは後から出現してきた新しい種と比べて、繁殖作戦上で有利な遺伝子をもっていた種が生き残り、不利な遺伝子をもっていた種が絶滅するというシナリオで、これこそまさに「進化論」である。

第2のシナリオは「弾幕の戦場 (field of bullets)」と呼ばれている。生物が絶滅するか否かは、無差別攻撃を受けて弾幕の中にいるような状況下においては、適応的な遺伝子があるかないかには無関係に、純粋に「運」(luck)で決まるというのである。生き延びた人は、特段「適応的」で優秀だったのではなく、単に「運」が良かっただけだったという解釈になる。このシナリオは、白亜紀の恐竜の絶滅を思い起こせば容易に理解できよう。地球に衝突した隕石の落下点に近かった生物は死滅している。その条件に、遺伝子や形式、能力や性格などの影響が入り込む余地はない。そして、実は津波や災害などのカタストロフに見舞われた人々の生死を決めたのも、よくよく考えてみれば「運」だったケースは相当にある<sup>30)</sup>。すべての原因を防災教育や防災体制の課題—個人の“過ち”—に帰することには無理がある。

ところで、さらに第3のシナリオは、本稿において極めて重要な意味を持っている。ラuppが「理不尽な絶滅 (wanton extinction)」と呼んでいるシナリオである。具体例を、大澤 (2011)<sup>27)</sup>は次のようなケースで説明している。白亜紀の天体衝突の後、大量の塵が宇宙空間にとどまり、地球は「衝突の冬」を迎えた。このとき多くの生物が絶滅したが、ケイソウ類は生き延びた。それは、ケイソウ類が、普段は湧昇流が巻き上げる栄養分で生きており、湧昇流が無くなる季節には、長期間休眠するメカニズムを持っていたからである。

ケイソウ類の休眠能力が生き残りの勝因だったと解釈すると、第1のシナリオに回収できるようにみえる。しかし、ケイソウ類の休眠能力は、天体衝突 (衝突の冬) に備えて進化してきた能力などではない。ゲームのルールが「偶然」変わってしまったために、たまたま生き残ることが出来た—そして、他の種は「不幸」にも絶滅した—のだ。換言すれば、ケイソウ類は、ルールの変更後において、遡及的に「適応的だった」とみなされるだけであって、それ以上でもそれ以下でもない。

さて、このラuppの絶滅論が、われわれにどんな示唆を与えてくれるというのか。防災活動の分野において、合理的な「目標」を設定して、効率的に“最大多数の最大幸福”だけを求めている社会があったとすれば、ひとたびゲームのルールが大変動したときに、その社会全体がカタストロフに見舞われることになる。社会全体が第1のルールに則っているような場合、その社会は一見すると効率的に運営されているようにみえて、実は、逆に脆弱性が極大化している可能性すらある。単一の目標を〈媒介〉にして駆動している組織や団体は、予想外の苦難に見舞われた際には、新しい局面を切り拓くことができずに、かえって一直線に破局へと突き進んでいく危険性がある。

ラuppの第3のシナリオである「理不尽な絶滅 (wanton extinction)」の、このさらに先にある未来に立つためには、社会の側は、不意のルール変更にもさえも備えておく必要がある点を自覚しておかなければなるまい。変更されてしまうルールがどんなものなのかは、“そのとき”が来るまで誰も知らない。しかし、未来永劫、変更されないルールなどない。それならば、社会の構えは、偶発的な状況を織り込

んだ土台から組み上げていくべきである。視野狭窄的な目標追及の効率性だけに没入するのではなく、視野を押し広げる多様性をも、同時にまた考究する必要がある。ここにおいて「倫理の虚構性」の在処である偶有性を新たな倫理の礎に据えることにわれわれは脱出路を見出すしかない。これが、防災教育が偶有性をアドバンテージにして構築すべきことの論理的な帰結である。

## 5. 防災教育という営みが持つ未定のインパクト

災害という未来の出来事を想定して現時の取り組みをなす防災教育は、文字通り未来性があるアクションである。ただしそのこと以上に、本章では、防災教育という営みが、原理的に新たな価値 (X) をすでにして内包していることに意義を見出していききたい。換言すれば、防災教育をおこなうことの意義は、論理的には矛盾しているように聞こえるかもしれないが「防災教育以上のことをなすことにつながるから」と言える。このフレーズの違和を解く鍵として援用するのは、大澤 (2013)<sup>16)</sup> がオタク文化の可能性を分析する際に使用し、未来の他者と連帯するポテンシャルティを掬い出すために提起した「余剰的同一性」という概念である。

オタクたちは、集散的・無意識的に、閉じたはずの世界の内から普遍的な価値 (U) の真実を求めて世界を希求し、熱情にかられて自身の嗜好をひたすらに追究している。そしてこの普遍的な価値 (U) は、常に意図せざる未知の価値 (X) を胚胎しながら社会に何らかの影響を与えていく。それは、ジャック・ラカンが「郵便は必ず届く」といったときと同じように<sup>31)</sup>、意図せざる何かも含めた「何か」である。オタクたちが直接に実感している「社会的現実」(A) の内実は、したがって等式で表せば「 $A=U+X$ 」となっている。この等式を変換すれば、「 $X=A-U$ 」となる。価値 (X) は、社会的現実 (A) と普遍的な価値 (U) との残差であり、現時点においては名付けることのできない意図せざる「something X」である。しかし、それは確かに存在している。そして大澤は、この未定の「X」こそが、未来の他者と連帯する契機となると指摘した。それは一体、どういうことなのか。

防災教育は、「防災」の名のもとに、多様な主体が安全・安心という普遍的な価値 (U) を具現化しようとして、いま熱心に取り組まれている。そこでは、前章で見たように、「倫理の虚構性」が与件とされながらも、それを内から突破するかたちで、今度は「偶有性」を与件として、多様な価値を含み込みながら新たな社会を共同的に構築していこうとしている。そのプロセスにおいては、他でもあり得るという偶有性の具体的な中身を、今を生きるわれわれは明確に意識することができない。少なくとも、言語化することまでには達しない。しかしそれでも「防災」をすることによって、やがて未定の「X」の輪郭が見えてくる。未来の地点から回顧的に現在を振り返ったときにはじめて、的確に「X」の名前を言い当てることができるだろう。そしてそのときの社会では、すでに「防災」を「防災」と呼ぶ必要さえ無くなっているのかもしれない。

矢守 (2013) が「何かがほんとうに身についた状態、何かがたしかに他者から自分のものとして伝えられた状態とは、特段意識することなく、そのことを実行できる状態に他ならない」と述べている<sup>21)</sup> とおり、「防災が…、防災が…」と、特殊な営みであるかのように語り合っている現時点においては、まだ「X」はわれわれの掌中には感覚されていない。しかし意図せざる瞬間に、それこそ千年の時を超えた先に、20 世紀から 21 世紀という古き良き時代には「防災」というコンセプトをめぐって社会が真剣に格闘していたことを懐かしく回顧しているのかもしれない。「防災」という取り組みの何たるかを価値づけできるまでには、われわれはまだ幾多の模索を積み重ねていく必要がある。

「防災」という営みは、したがって“終わりなき旅”の道中のひとこまに過ぎず、未来の他者に呼びかけるためのひとつの契機として、人類が絶滅するまでの有限な時間<sup>32)</sup> のなかで、時代性を帯びたチャレンジとして措定しなおされる必要があるだろう。

## 6. 考察：防災教育のポテンシャルティを自己反省すべきこと

以上、防災教育の土台を支える倫理を考究するために、まず「倫理の虚構性」を災害事象の偶有性から確認し (第 3 章)、そしてその偶有性を前提にした防災教育を構築するための理路を開き (第 4 章)、さいごに防災教育のアクションに内包された未知なるポテンシャルティについて検討した (第 5 章)。



約言すれば、現在のリスク社会のなかで防災教育に傾注することの意味を、「大事だから大事」という同義反復から解放し、「些事の中にこそ秘蹟が宿っている（可能性がある）」行為のパッケージとして読み替えてきた。

このような知見は、すでにこれまでに矢守（2018）<sup>8)</sup>が洞察してきたような「インストゥルメンタルな関係性」や「コンサマトリーな関係性」を徹底することのなかに新たな可能性を見出すアプローチや、宮本<sup>33)</sup>が検討してきたような「めざす関わり」と「すぞす関わり」を止揚するなかに新たな可能性を見出すことなどと接続することができる。いずれもが、本質的な視座を持って防災教育が直面している閉塞をその内側から乗り越えようとする処方であることがわかるだろう。ここにおいて第3章で素通りしてきた「防災という営みの究極の目的は、本当に生死を分かち未定の危機を回避すること（だけ）なのか」という問いの答えは、「それ以上のもっと大きなこと」と言えるし「それ以前のもっと当たり前のこと」とも言うことができる。防災教育は、世代を超えて生の充溢を確保しようとする生の営みの本流のことである。

本稿では、自然観・災害観・歴史観・宗教観などの視点に照らして、倫理の基盤を検討することはできなかった。これは、今後の検討課題としたい。これからも実践者のひとりとして様々な機会をとらまえて、取り組みのセルフチェックをしながらも、同時に防災教育のポテンシャルティに目を遣ることが、防災教育を充実化ならしめる“心ある道”<sup>34)</sup>であると考えている。

#### 謝辞

本研究は、「見田真木研究会」における長年の討議から、たくさんの示唆を得ております。京都大学の矢守克也先生、大阪大学の渥美公秀先生、関西大学の城下英行先生、そして兵庫県立大学の宮本匠先生に、あらためて感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました。

#### 参考文献

- 1) たとえば、文部科学省「防災教育支援に関する懇談会 中間とりまとめについて 中間とりまとめ―「生きる力」を育む防災教育を支援する―」（2007）の資料などでも「促進」という言葉が複数回登場している。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/kaihatu/006/index.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kaihatu/006/index.htm)（最終確認2020.6.20）
- 2) “過ち”という言葉を含んだ記事も多いが、その多くは「政府」などの主語が先に置かれている。東日本大震災に関して、たとえば書籍のタイトルに“過ち”という言葉を使用している例としては、谷口宏充・菅原大助・植木貞人（2019）『東日本大震災 [災害遺産] に学ぶ 一來たるべき大地震で同じ過ちを繰り返さないために』、海文堂書店などがある。
- 3) このあと倫理的な分析を進めるが、もちろん、3.11に関して、防災教育とリンクさせるかたちで倫理的な検討をおこなった著作や研究はいくつもある。著作でいえば、『災害に向き合う 高校倫理からの哲学 別巻』（2012）直江清隆・越智 貢（編著）岩波書店などがあげられる。
- 4) そして、「津波てんでんこ」の多義的・多層的な意味を検討したチャプターがある矢守克也（2013）『巨大災害のリスク・コミュニケーション 災害情報の新しいかたち』ミネルヴァ書房は必読の書であると言えよう。
- 5) 大澤真幸（2012）、夢よりも深い覚醒へ ―3.11後の哲学、岩波書店。
- 6) 「ハインドサイト（hindsight）」に関しては、次の書籍が有用である。『後知恵 過去を振り返ることの希望と危うさ』2014（新曜社）マーク・フリーマン（鈴木聡志・訳）。なお、当該著書では、「後知恵」のネガティブな側面だけを捉えているわけではないことに留意せよ。
- 7) 矢守克也（2010）、アクションリサーチ 実践する人間科学、新曜社。
- 8) 矢守克也（2018）、アクションリサーチ・イン・アクション 共同当事者・時間・データ、新曜社。
- 9) 近藤誠司（2017）、校内防災放送の長期的な教育効果に関する基礎的考察 ―神戸市長田区真陽小学校におけるアクションリサーチから―、日本安全教育学会第18回岡山大会プログラム・予稿集、95-96。

- 10) 近藤誠司・植竹 遥・石原凌河 (2018)、逆ベクトル型防災学習のポテンシャルティ ― 和歌山県広川町における実践事例から ―、日本安全教育学会第 19 回横浜大会プログラム・予稿集、69-70.
- 11) 近藤誠司・柴田悠馬 (2020)、地区防災計画策定事業による住民の意識と行動の変容 ―草津市山田小学校区 4 年目の実態調査―、地区防災計画学会誌第 17 号、58-59.
- 12) 近藤誠司・谷岡 茜・廣瀬友乃・濱崎采如・島本航太・小山倫史 (2020)、山間集落における地域防災力向上策の検討 ―福井市高須集落におけるアクションリサーチ―、地区防災計画学会誌第 17 号、60-61.
- 13) 近藤誠司・西田一貴 (2020)、神戸市長田区真陽地区“トラメガ作戦”の実態調査 ―津波避難ルール浸透度の分析―、地区防災計画学会誌第 17 号、62-63.
- 14) 近藤誠司・長谷川夏帆・宮崎愛子・濱崎采如・山下紗也加 (2020)、要配慮者の個別対応計画策定プロジェクトの進展 ―兵庫県尼崎市における“きがるーちん”モデルの提唱―、地区防災計画学会誌第 17 号、72-73.
- 15) 趙 鎮杓・近藤誠司 (2020)、高齢者の防災意識に対するメディア効果 ―京丹波 C A T V における多重的な災害情報発信事例を通して―、地区防災計画学会誌第 17 号、74-75.
- 16) 大澤真幸 (2013)、<未来>との連帯は可能である。しかし、どのような意味で>、FUKUOKA U ブックレット No.4、弦書房.
- 17) デイヴィッド・エドモンズ (2015)、鬼澤忍 (訳)、太った男を殺しますか? 「トロリー問題」が教えてくれること、太田出版.
- 18) たとえば、「正義」は決められるのか? トロロッコ問題で考える哲学入門」トーマス・カスカート (2015) かんき出版などが読みやすい.
- 19) Beck, Ulrich (1986) RISIKOGESELLSCHAFT Auf dem Weg in eine andere Moderne, Suhrkamp Verlag. 【ウルリッヒ・ベック (1998) 危険社会 新しい近代への道, (東廉・伊藤美登里, 訳), 法政大学出版局 (叢書・ユニベルシタス)】
- 20) 市野澤潤平 (2014)、リスク・コンシャスな主体―イントロダクション、「リスクの人類学 不確実な世界を生きる」東賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓 (編著)、121-131、世界草思社.
- 21) 矢守克也 (2013)、巨大災害のリスク・コミュニケーション 災害情報の新しいかたち、ミネルヴァ書房.
- 22) Rasing for Effective Charity (2020)、<https://reg-charity.org/> (最終確認 2020.6.20)
- 23) Singer, Peter. (2015) The Most Good You Can Do -How Effective Altruism is Changing Ideas About Living Ethically-, Yale University.
- 24) 真木悠介 (1977)、現在社会の存立構造, 朝日出版社.
- 25) 矢守克也 (2016)、災害論：人間・自然・社会, 日本グループダイナミックス学会第 63 回大会発表論文集、27-30.
- 26) Weil, Simone (1947) LA PESANTEUR ET LA GRACE. 「重力と恩寵」(2017)、富原真弓 (訳)、岩波書店.
- 27) 二重疎外のコンセプトに関しては、以下を参照のこと。見田宗介 (2006)、社会学入門 一人間と社会の未来、岩波書店.
- 28) 真木悠介 (2003)、時間の比較社会学、岩波書店.
- 29) 大澤真幸 (2011)、文明の内なる衝突 9.11、そして 3.11 へ、河出文庫.
- 30) 近藤誠司 (2018)、平成 29 年 7 月九州北部豪雨における“全員無事集落”の避難行動 ～福岡県朝倉市平榎地区住民の初動実態調査～、第 37 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集、215-216.
- 31) 大澤真幸 (2011)、社会は絶えず夢を見ている、朝日出版社.
- 32) 加藤典洋 (2014)、人類が永遠に続くのではないとしたら、新曜社.
- 33) 矢守克也・宮本 匠 (2016)、現場でつくる減災学 共同実践の五つのフロンティア、新曜社.
- 34) 真木悠介 (2003)、気流の鳴る音 交響するコミュニケーション、筑摩書房.

(受理：2020年6月16日)

(掲載決定：2020年8月1日)